資料３

令和元年度「男女間における暴力に関する調査」の概要について

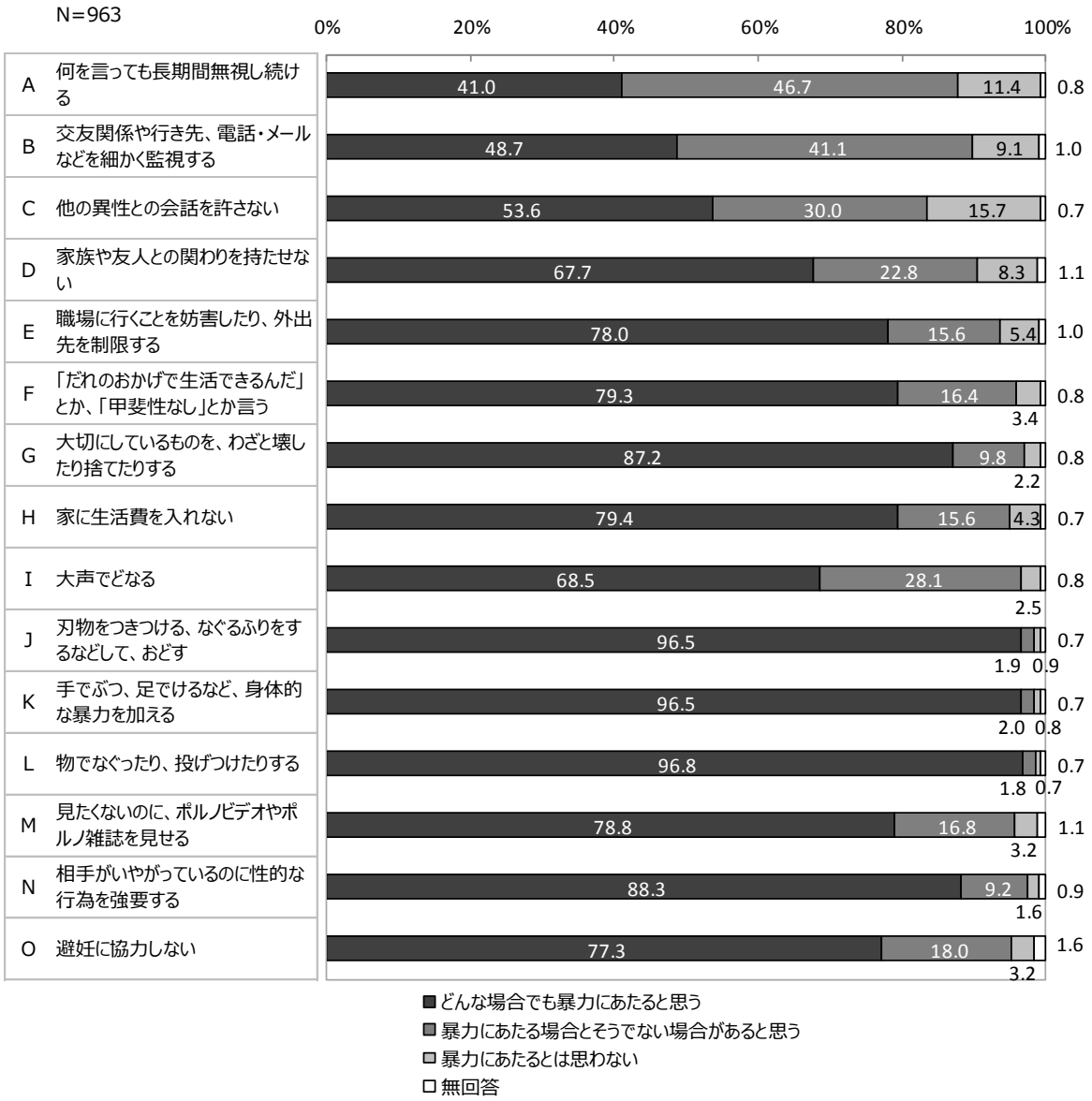
１　調査概要

(1)調査対象　　県内在住の 20 代から 70 代の男女各 1,000 人(計 2,000 人)
(2)調査期間　　令和元年 10 月～11 月
(3)調査方法　　郵送返送方式
(4)回収率　　48.2%　（男性 401 人、女性 560 人（計 961 人））

２　調査結果の概要　　※【　】は参考資料３のページ番号

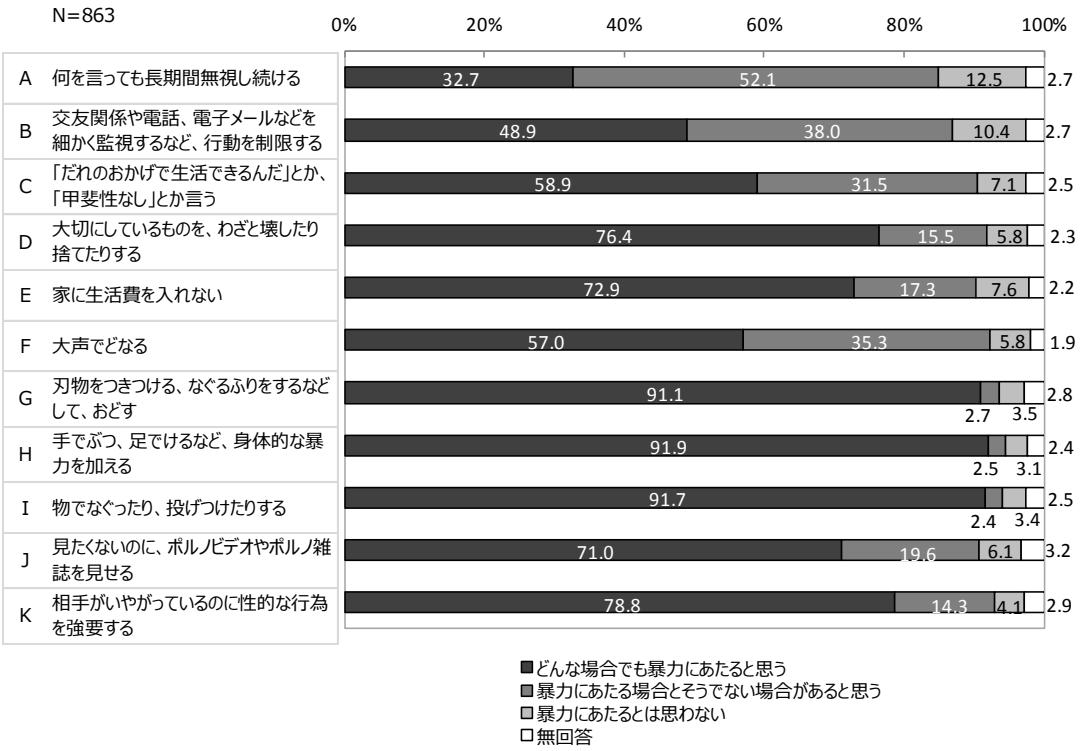
(1)夫婦間等における暴力（ＤＶ）行為に対する意識【P. 7】

・夫婦やパートナーの間で行われた暴力行為が「どんな場合でも暴力にあたると思う」とした割合が多い行為は、「Ｌ　物でなぐったり、投げつけたりする」(96.8%)、「Ｊ　刃物をつきつける、なぐるふりをするなどして、おどす」(96.5%)、「Ｋ　手でぶつ、足でけるなど、具体的な暴力を加える」(96.5%) などの身体的な暴力行為で、その割合は９割を超えている。



・前回調査と比較して、「『だれのおかげで生活できるんだ』とか、『甲斐性なし』とか言う」が、どんな場合でも暴力であるとの認識が 20.4 ポイント増加したほか、「大声でどなる」が 11.5 ポイント、「大切にしているものを、わざと壊したり捨てたりする」が 10.8 ポイント増加するなど、前回調査のほぼ全ての行為について「どんな場合でも暴力にあたると思う」割合が増えており、夫婦間等であっても暴力にあたるとの認識が高まっている。

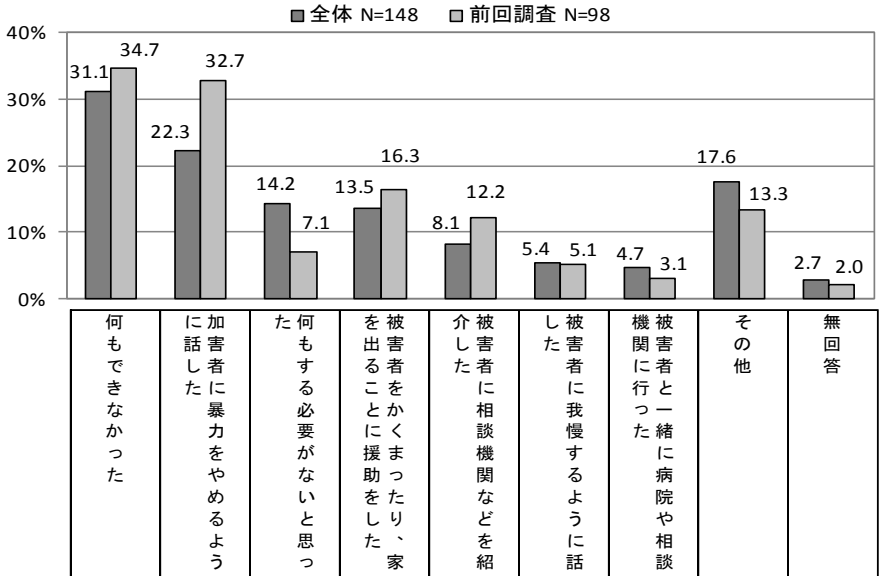
＜参考　前回調査＞



(2) 身近な暴力被害者への対応【P.12】

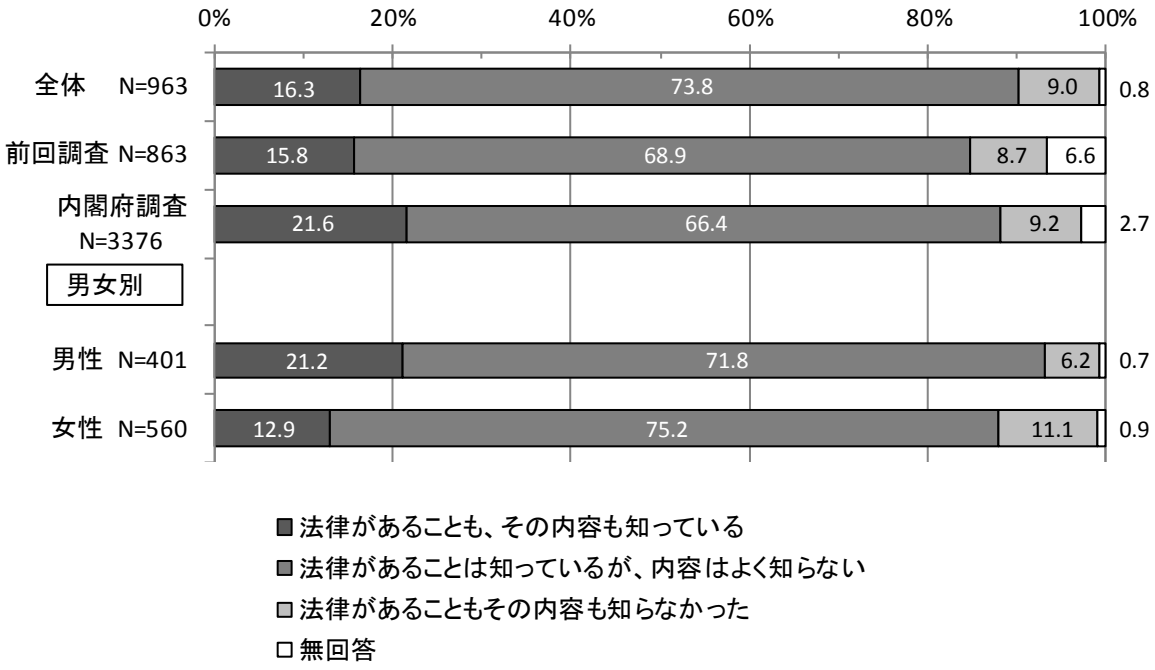
・身近でＤＶがあることを認知している人に、それを知って、どのような行動をとったか聞いたところ、「何もできなかった」が 31.1%で最も多く、次いで「加害者に暴力をやめるように話した」が 22.3%となった。

・前回調査と比較して、「加害者に暴力をやめるように話した」が 10.4 ポイント減少。



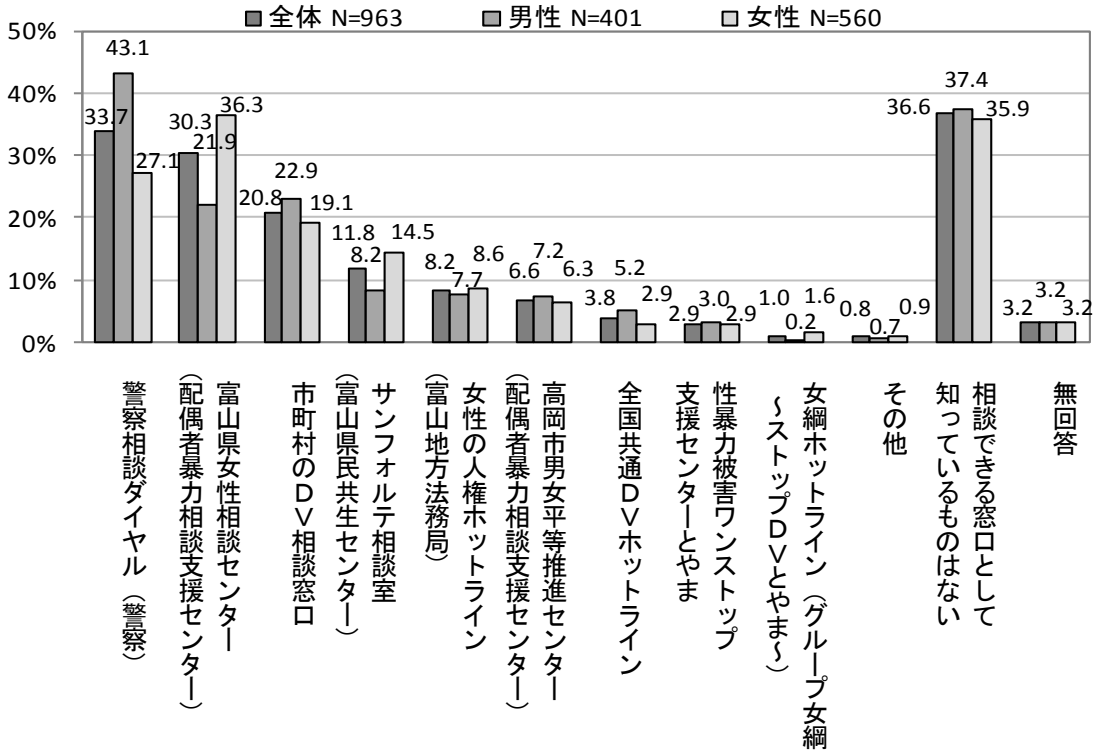
(3) ＤＶ防止法の認知状況【P. 13】

・「法律があることも、その内容も知っている」、「法律があることは知っているが、内容はよく知らない」を合わせてＤＶ防止法を知っている人は 90.1%と９割を超えており、前回調査に比べて法律があることの認知状況は 5.4 ポイント増加している。



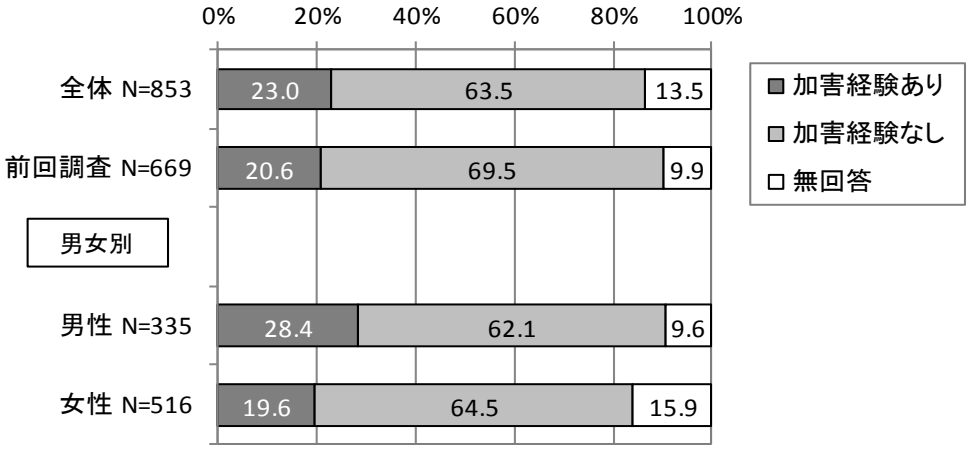
(4) 相談窓口の認知度【P. 14】

・相談窓口として知っている割合は、「警察相談ダイヤル（警察）」が 33.7%と最も高く、次いで「富山県女性相談センター（配偶者暴力相談支援センター）」30.3%、「市町村のＤＶ相談窓口」が 20.8%となっている。



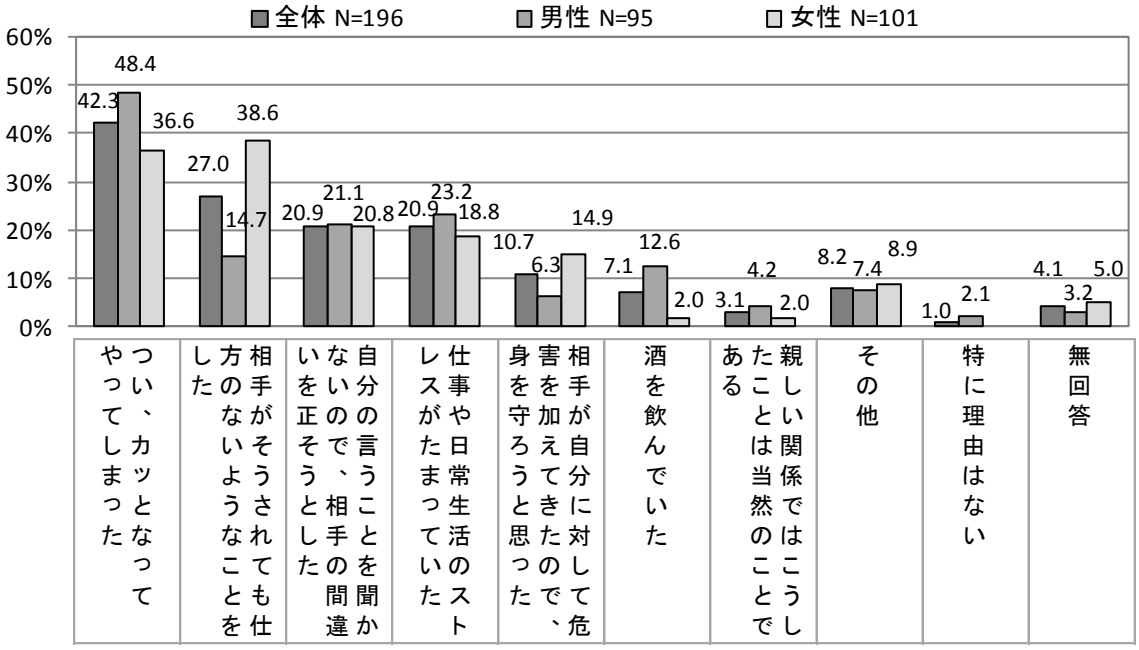
(5)配偶者・パートナーへの加害経験と加害理由【P.16、P.23】

・配偶者・パートナーへ何らかの加害経験がある人は23.0%(男性28.4%、女性19.6%)となっており、前回調査に比べると2.4ポイント増加した。



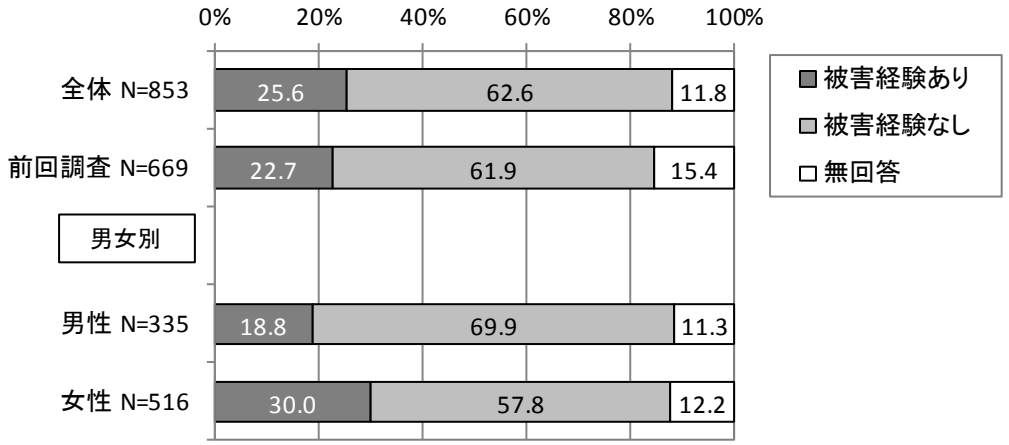
・ＤＶ加害経験のある人に理由を聞いたところ、「つい、カッとなってやってしまった」が42.3%と最も高くなっている。

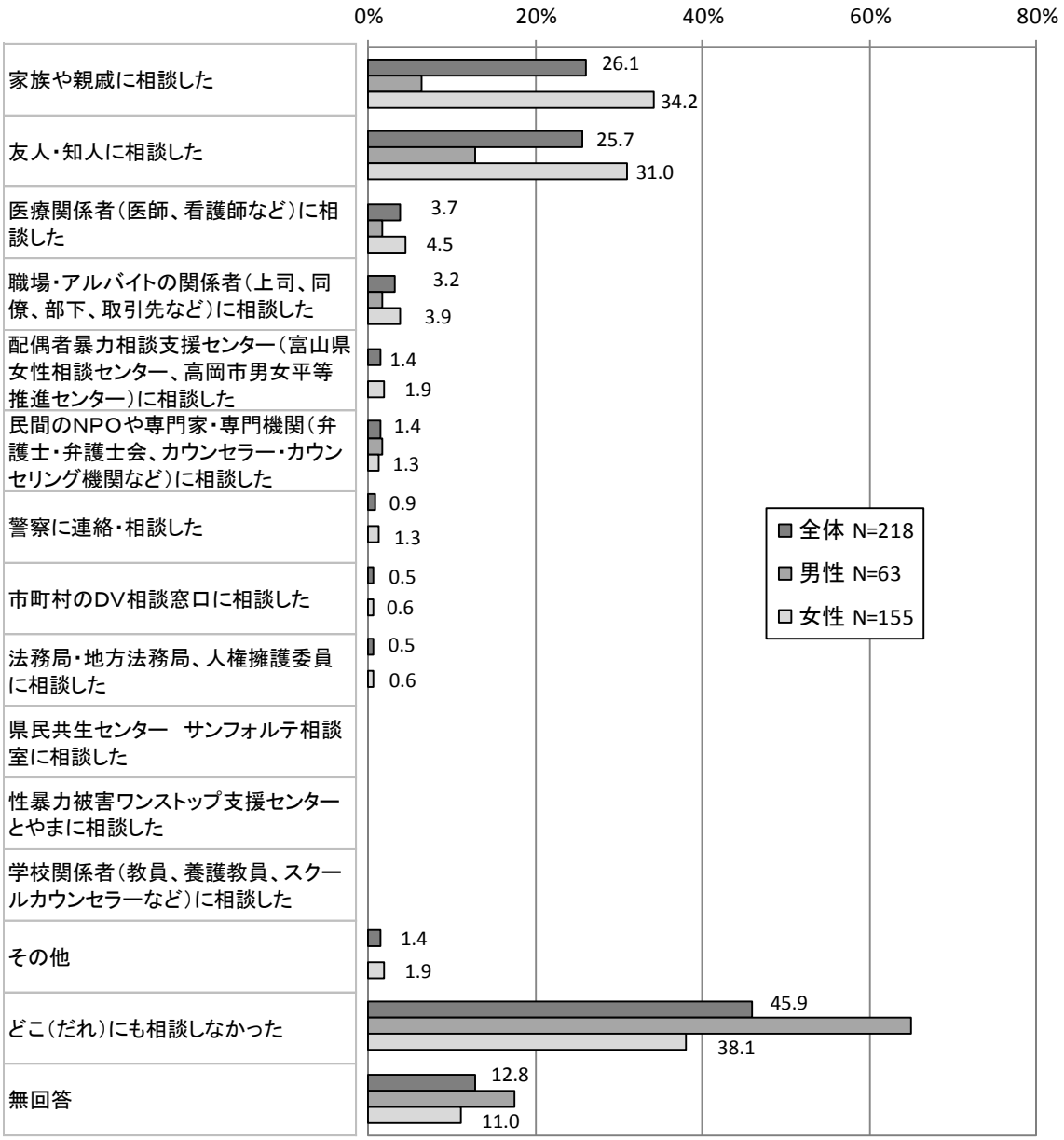
・男女別でみると、男性は「つい、カッとなってやってしまった」が48.4%と最も高く、一方、女性は「相手がそうされても仕方のないようなことをした」が38.6%と最も高くなっている。



(6)配偶者・パートナーからの被害経験と相談先【P.19、P.27】

・配偶者・パートナーからの何らかの被害経験がある人は 25.6%(男性 18.8%、女性 30.0%)となっており、前回調査に比べ2.9ポイント増加した。

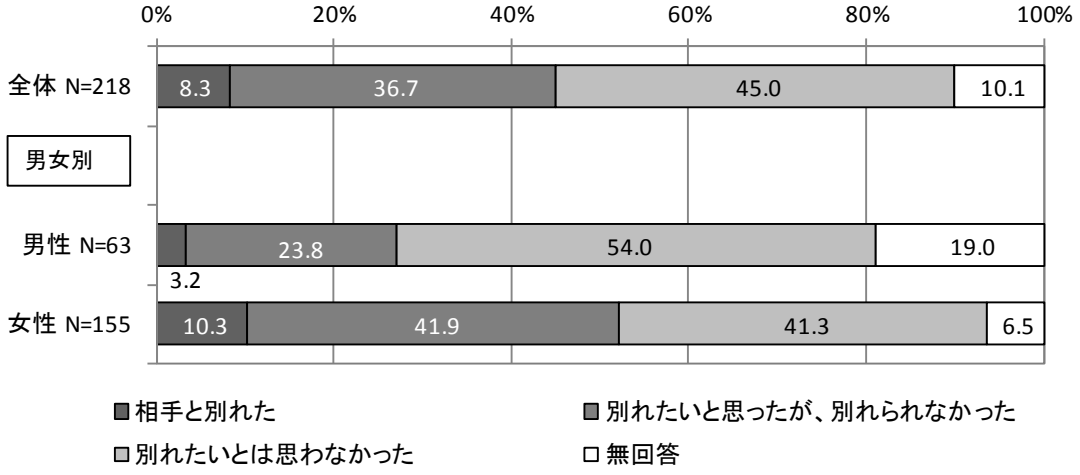




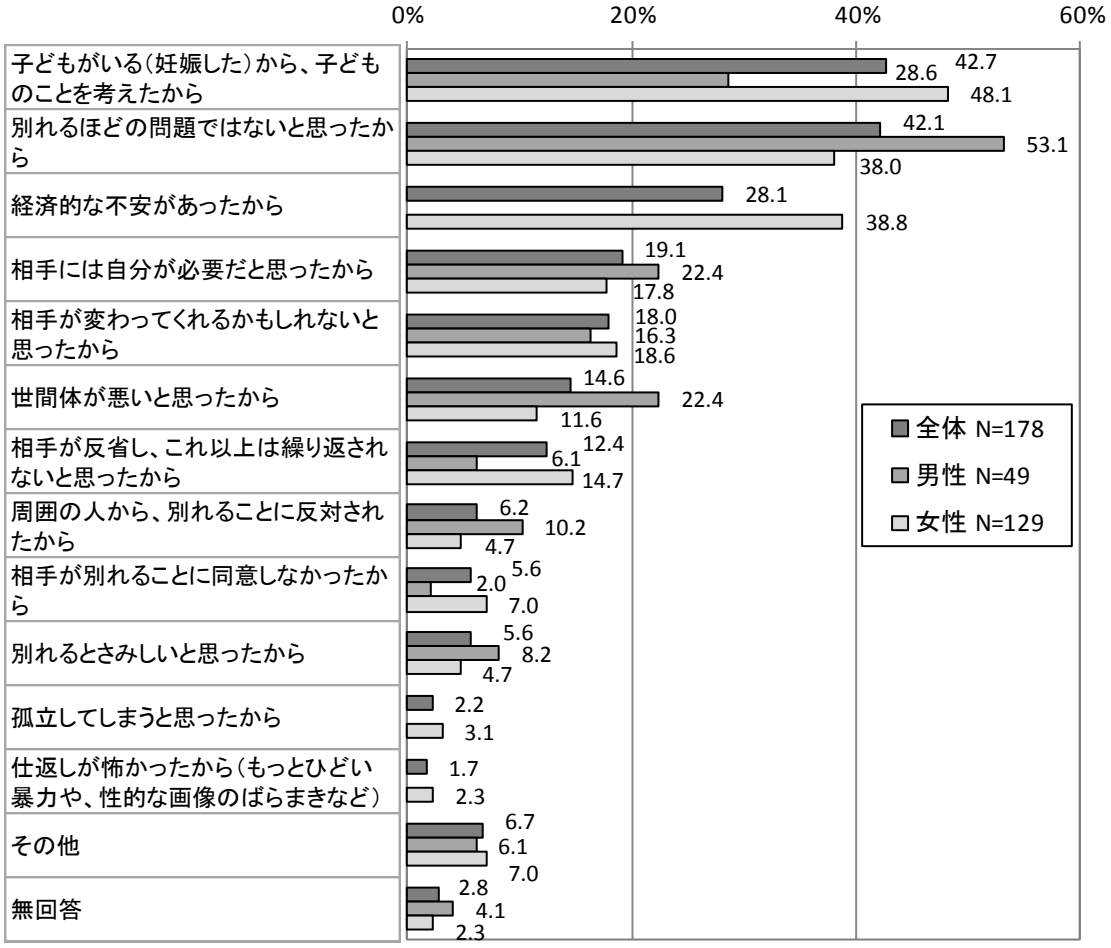
・ＤＶ被害経験がある人の相談先としては、「家族や親戚に相談した」が 26.1%、「友人・知人に相談した」が 25.7%となっているが、「どこ（だれ）にも相談しなかった」が 45.9%と最も高くなっている。
・男女別でみると、女性は「家族や親戚に相談した」が 34.2%と男性に比べ 27.9 ポイント高く、また、「友人・知人に相談した」が 31.0%と男性に比べ 18.3 ポイント高くなっている。男性は「どこ（だれ）にも相談しなかった」が 65.1%と女性（38.1%）と比べて 27.0 ポイント高くなっている。

(7) 暴力被害を受けたときの行動【P.29】

・ＤＶ被害経験のある人が暴力行為を受けたときどうしたかをみると、「相手と別れた」が 8.3%、「別れたいと思ったが、別れられなかった」が 36.7%、「別れたいとは思わなかった」が 45.0%となっている。
・男女別でみると、女性は「別れたいと思ったが、別れられなかった」が 41.9%と、男性と比べて 18.1 ポイント高くなっている。男性は「別れたいとは思わなかった」が 54.0%と、女性に比べて 12.7 ポイント高くなっている。

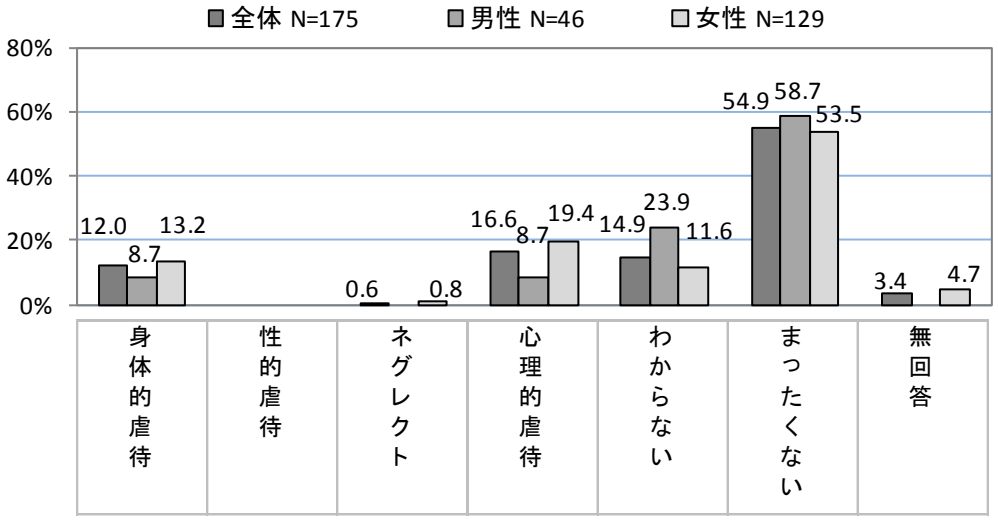


・「別れたいと思ったが、別れられなかった」、「別れたいとは思わなかった」とした人の別れなかった理由をみると、「子どもがいる（妊娠した）から、子どものことを考えたから」が 42.7%、「別れるほどの問題ではないと思ったから」が 42.1%、「経済的な不安があったから」が 28.1%となっている。
・男女別でみると、女性は、「子どもがいる（妊娠した）から、子どものことを考えたから」が 48.1%と最も高く、男性と比べて 19.5 ポイント高くなっている。次いで、女性は、「経済的な不安があったから」が 38.8%であるが、男性は、ゼロである。
・男性は、「別れるほどの問題ではないと思ったから」が 53.1%と最も高く、女性に比べて 15.1 ポイント高くなっている。

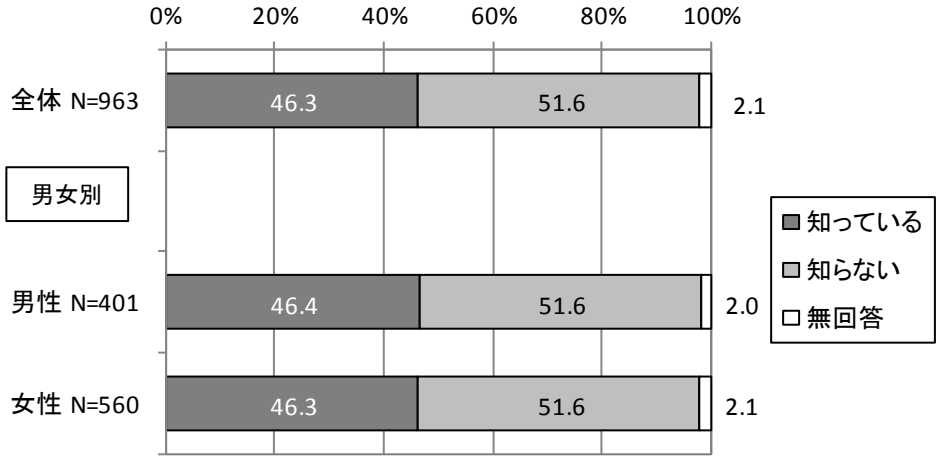


(8) ＤＶ被害者の子どもへのＤＶ加害者（配偶者）からの虐待、面前ＤＶの認知状況【P. 34】

・配偶者やパートナーからのＤＶ被害経験があって子どものいる方について、ＤＶ加害者（配偶者）からの子どもの虐待被害は、「心理的虐待」が 16.6％、「身体的虐待」が 12.0％、「ネグレクト」が 0.6％となっている。

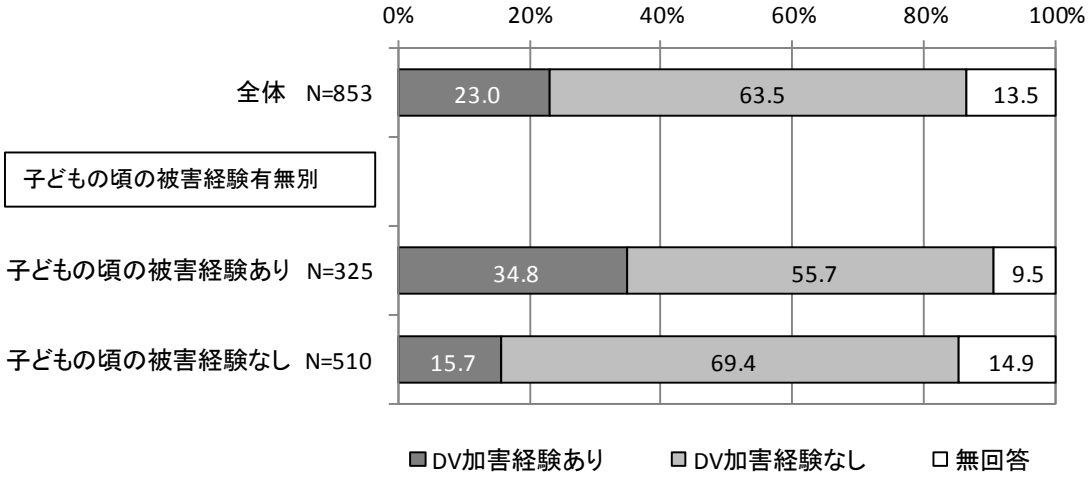


・子どもの前での暴力等が児童虐待にあたることを「知らない」は 51.6%と、「知っている」(46.3%)を 5.3 ポイント上回っている。



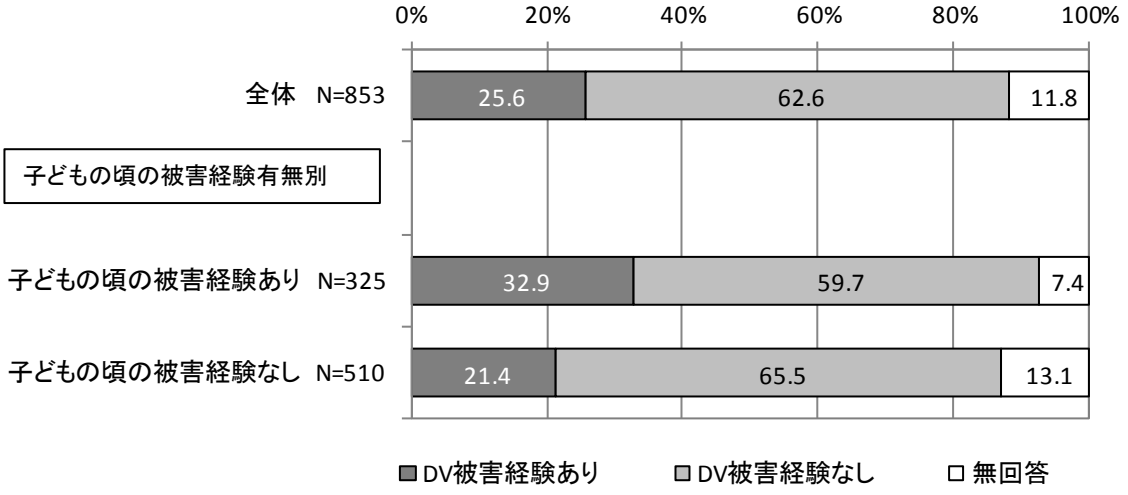
(9)虐待被害経験者が、のちに夫婦・パートナー間のＤＶ加害者になる割合 P.38】

・18 歳までの家庭における虐待被害経験があり、のちに夫婦やパートナー間においてＤＶ加害経験があるとした人は 34.8%であり、虐待被害経験がなく、のちに夫婦やパートナー間においてＤＶ加害経験があるとした人の割合（15.7%）を 19.1 ポイント上回っている。



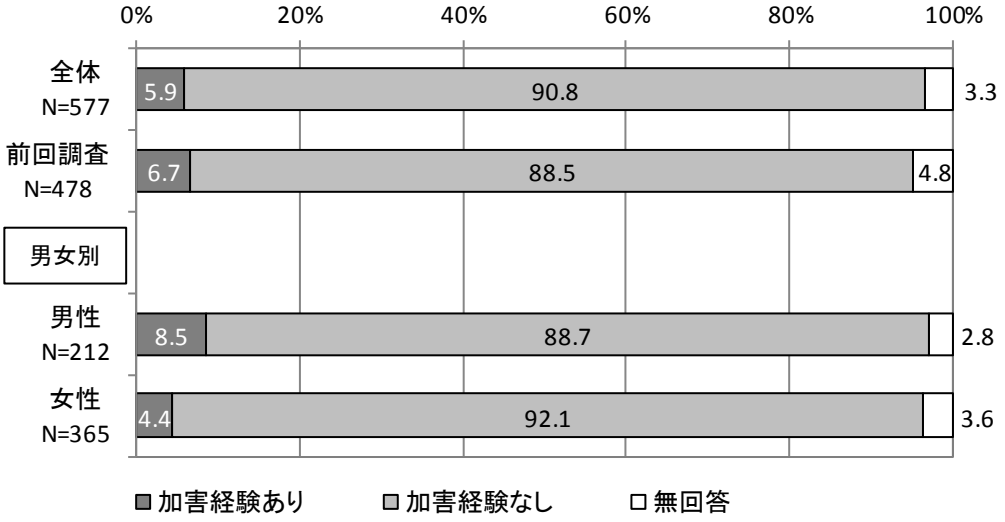
(10)虐待被害経験者が、のちに夫婦・パートナー間のＤＶ被害者になる割合【P.38】

・18 歳までの家庭における虐待被害経験があり、のちに夫婦やパートナー間においてＤＶ被害経験があるとした人は 32.9%であり、虐待被害経験がなく、のちに夫婦やパートナー間においてＤＶ被害経験があるとした人の割合（21.4%）を 11.5 ポイント上回っている。

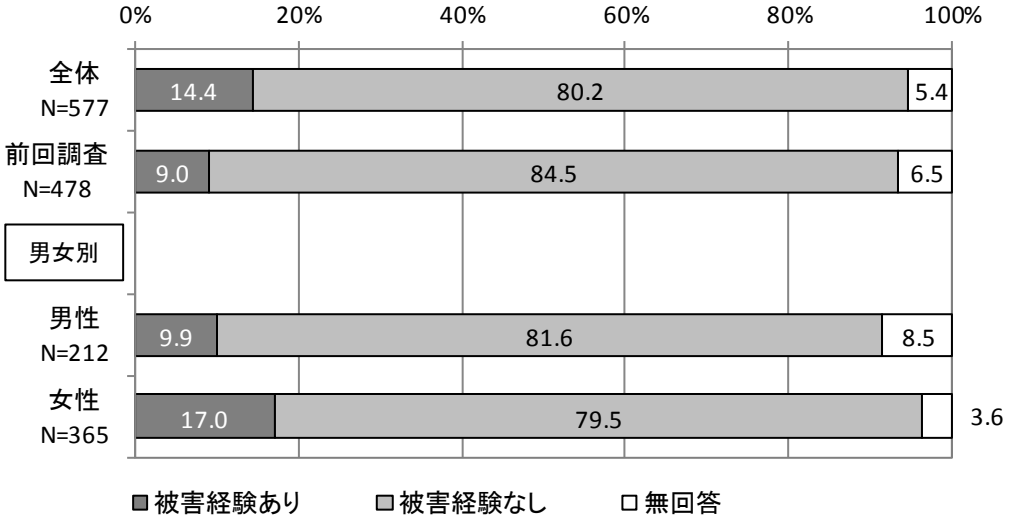


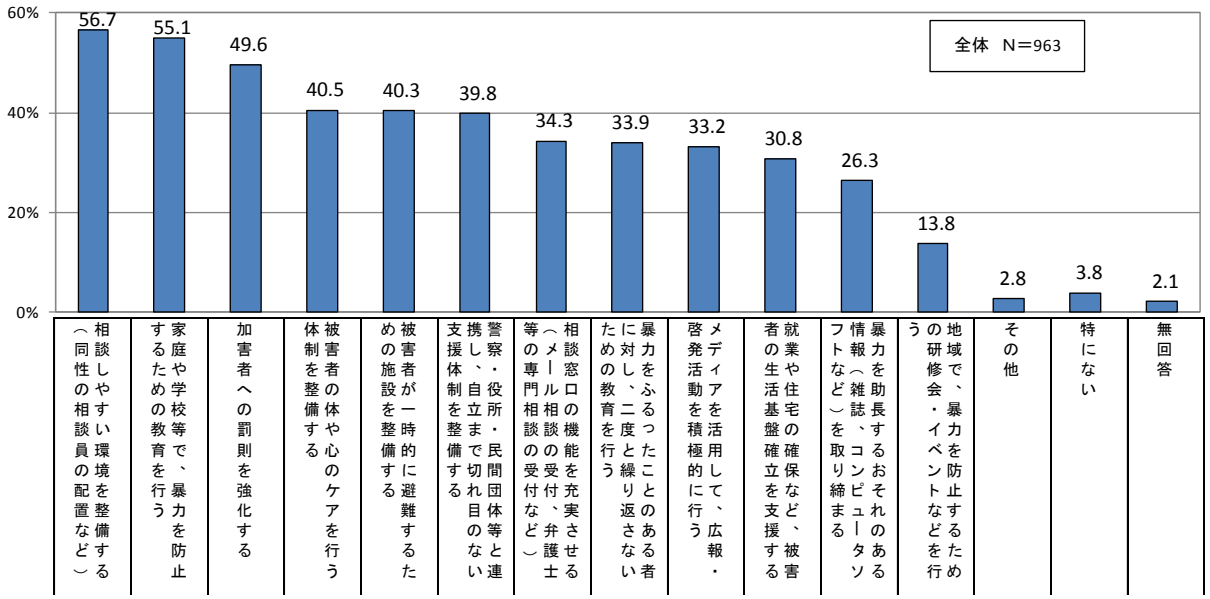
(11)10歳代から20歳代における交際相手との間の暴力（デートＤＶ）の経験【P.41、P.43】

・交際相手への加害経験があるとした割合は5.9%と前回調査と比べると0.8ポイント減少した。



・交際相手からの被害経験があるとした割合は 14.4%と前回調査と比べると 5.4 ポイント増加した。



(12) 男女間における暴力を防止するための対策と被害者への支援【P. 49】

・「相談しやすい環境を整備する（同性の相談員の配置など）」が 56.7%と最も高く、次いで、「家庭や学校等で、暴力を防止するための教育を行う」が 55.1%、「加害者への罰則を強化する」が 49.6%の順になっている。